

道路技術者 片平信貴の足跡とアーカイブズ

橋本 政子¹

¹正会員 道路文化研究所 研究員 (〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1)

E-mail:Hashimoto.ma.2010@gmail.com

わが国の近代道路計画史上のエポックメイキングとなった日本初の高速道路の完成から半世紀を経た。片平信貴(1913-1989)は、戦前から調査計画に携わり、名神・東名高速道路建設時代になると、名神高速道路部長、高速道路静岡建設局長等を歴任し、現場を率いた。本稿では、道路技術者として活躍した片平自らが著した95編の報文・論文・文献等の資料、さらにこれら資料の引用や他者が片平について記述した記録や文書も含めて網羅的に収集し、これら計194編を一次資料として片平の50年余りにわたる仕事を概括するとともに、片平のまなざしを通して日本の高速道路黎明期の計画や設計思想の概況を辿る。そして、日本の高速道路史における片平の位置づけについて考察を試みる。

Key Words : Nobutaka KATAHIRA, Archives, Expressway, History, Engineers

1. はじめに

(1) 背景と目的

高速自動車国道法に基づく日本初の高速道路として建設された名神高速道路の栗東(滋賀県)-尼崎(兵庫県)間の開通から半世紀を経た。戦前の調査計画を端緒に、名神高速道路、続く東名高速道路の計画建設を牽引した道路技術者の一人、片平信貴(1913-1989)は、昨秋、生誕100年を刻んだ。本稿では、片平の50年余りにわたる道路技術者としての足跡の全容を明らかにするとともに、片平のまなざしから、高速道路黎明期の時代的・思想的背景を辿る。そして、日本の高速道路史における片平の位置づけについて考察する。

(2) 先行研究と本研究の特質

名神・東名高速道路建設に着目し、片平の経歴と仕事の概要を調べ、その道路計画、設計に関する思想を分析した香川の論文⁽¹⁰⁵⁾がある。香川が「高速道路のような大規模かつ多くの技術者が関わるインフラに関して、個人の計画・設計思想を明らかにする研究は存在しない」と述べたように、現時点でも高速道路への技術者個人の計画・設計思想の反映や影響を対象とする研究は非常に少なく、名神・東名高速道路に関与したドイツ人技師ドルシュを対象とした論文⁽¹⁰⁶⁾が確認されるに留まる。

本稿は、片平に関する資料を網羅的に収集・整理し、片平の足跡を明らかにするに留まらず、それら資料から日本の高速道路黎明期の時代背景、周辺の技術者群像を読み取り、重ね合わせて考察している点に特徴がある。

(3) 研究方法

研究方法は、資料分析と関係者へのヒアリングに基づいている。片平が自ら著した95編におよぶ報文・論文・文献とそれらの引用を含め片平に関する記述が確認された資料99編を一次資料とし、高速道路の計画技術については既往文献を基礎資料として用いた。

一次資料は、(a)片平信貴アーカイブズとしてI)~V)に整理した。なお、(a)の資料名は補注に記し、引用する際は、○○⁽⁸⁶⁾と記すことで、参考文献として用いた(b)基礎資料と区別している。

(a) 片平信貴アーカイブズ(194編)

- I)片平が著した論文、報文・共著・対談を含む86編^{(1)~(86)}
- II)片平の著・編による冊子、文献類9編^{(87)~(95)}
- III)他者が片平について紹介、論評した文書14編^{(96)~(109)}
- IV)片平を追慕、追悼した文・冊子類79編^{(110)~(188)}
- V)その他:i)~iv)の引用、派生による記録物類6編^{(189)~(194)}

(b)基礎資料:高速道路の計画・建設に関しては、名神高速道路建設誌(総論)¹⁾、同(各論)²⁾、東名高速道路建設誌³⁾、日本道路公団三十年史⁴⁾、日本土木史-大正元年~昭和15年⁵⁾、同-昭和16年~昭和40年⁶⁾の他、関連の文献^{7)~9)}を参照した。

(c) ヒアリング

日本道路公団時代に名神・東名高速道路の建設に携わり、後に片平エンジニアリングに入った武部健一氏⁽ⁱ⁾、大泉紀男氏⁽ⁱⁱ⁾と大学卒業後に設立間もない片平エンジニアリングに入った浅見邦和氏⁽ⁱⁱⁱ⁾のご協力を仰いだ。

2. 片平信貴の経歴と活動年譜（表-1）

本章では、片平の経歴と活動、技術者らとの出会いと関係性を概括する。

(1) 東京帝国大学土木工学科での恩師との出会い

片平信貴は、1913(T2)年9月13日、福島県信夫郡渡利村に生まれた。「成績が良くイヂメラレッコ」⁽¹⁰⁰⁾だった宮城第二中学校(四修)、第二高等学校(仙台)理科甲類を卒業し、1933(S8)年に東京帝国大学工学部土木工学科に入学する。そして、1922(T11)年から1942(S17)年まで、同学科で道路工学を教えていた藤井真透^(iv)と出会う。

(2) 内務省・建設省での20年と先輩技術者との出会い

1936(S11)年、片平が大学を卒業し、内務省雇となった同年11月、藤井は第4代土木試験所長に就任する。片平は、技手補(荒川上流改修事務所)、内務技手(東京土木出張所)を経て、1939(S14)年に内務技師(土木局)となる。この時、14才年上の先輩技術者であり、日本の高速道路建設に向けて奔走する菊池明^(v)と出会う。

(3) 大学での10年間の講義と『道路工学』刊行

官吏時代の1942(S17)から1953(S28)年の約10年間、藤井の後任として道路工学の講師を兼任する。恩師の教育者としての姿勢を習い、片平も「建設省在任中から東京大学の講師として道路工学の講義を担当して日本の建設界を支えている多くの人材を育成」⁽¹¹⁰⁾した。兼任講師を離れてのち、『道路工学概論』⁽⁸⁸⁾と『道路工学』⁽⁸⁹⁾を刊行する。1931(S6)年に牧野雅楽之丞^(vi)が刊行した同名の書を片平は「わが国における“近代道路工学”として体系付けられた原点の一つ」と評価している⁽¹⁰⁴⁾。牧野の書から25年後に刊行された片平の『道路工学』の序には、菊池による、「道路全般を見つめ、その本質を常に見失わない技術者」⁽⁸⁹⁾の言葉が記されている。

(4) 日本道路公団での14年間

1956(S31)年に日本道路公団が設立されると、建設省から公団(計画部技術課長)へ転じる。前半の8年の間(40代)、名神高速道路部第一課長(部長は理事の菊池が兼務)、名神高速道路部長、高速道路計画部長と計画整備の急進に合わせるかのように役職も変転する。公団へ転じて7年の後、栗東～尼崎間が部分開通する。

公団勤務後半の6年間(50代)のうち、1964(S39)年から約4年間、理事と静岡建設局長を併任する。同時期、日本は高度成長期の時勢を受け、国土開発の勢いも増していく中で、東京オリンピック開催、東海道新幹線の開業、そして名神高速道路の全線開通がへと続いていく。そして、東名高速道路が全線開通となった1968(S43)年、静岡建設局長を退任、1970(S45)には公団理事を退任する。

3. 高速道路の誕生と道路技術者片平信貴の仕事

(1) 日本の高速道路胎動期、官吏時代、初めての仕事

a) 戦前：重要道路整備調査と大東亜道路会議出席

1933年(S8)年に発表されたアウトバーン建設計画は、5年後には3,000Km開通式が行われる程進展した。日本でも1940(S15)年から1942(S17)年にかけて、内務省国土局道路課を中心とし、土木出張所、府県庁諸機関等動員の



写真-1 片平信貴「高速道路」
6号 1966年3月5日

が行われ、1943(S18)年

から1944(S19)年には名古屋～神戸間の測量が行われ

「全国自動車国道網計画」が策定されるに至った。この間、1942(S17)年に国土局配属となった片平は、菊池と共に同年5月に東京で開催された第一回大東亜道路技術会議に出席している。自動車道路に関する部会では、「朝鮮半島から大陸へ渡り中国、タイ、インド、ビルマ東南アジアの諸国を経て遠くヨーロッパの道路網とも結ぶ計画」¹⁰⁾等が説明された。しかし、戦況悪化に伴い、調査は打ち切りとなった。

b) 戦後：高速自動車道路調査と米国出張120日間

「昭和20年、荒廃の果ての終戦を迎えて連合軍の管理の下に置かれたわが国では、何もかもが再出発のための陣痛を味わっていた」⁽⁶⁷⁾。このような状況下から「戦争中、疎開しておいた自動車国道関係の資料も次第に集められ、高速道路建設への動きがはっきりした陣痛の形で開拓され」⁽⁶⁷⁾ていった。1950(S25)年、道路局道路企画課長補佐になって半年後、片平は米国に120日間出張する。米国の30州以上で進められていた有料道路計画・建設の「舗装設計、施工技術、交通安全施設的设计、運用方法、高速道路の計画、各州道路局の組織・運営方法」の調査と概況の把握を目的とした出張⁽⁶⁷⁾であった。帰国の翌1951(S26)年、「東京～神戸間自動車国道調査」が再開される。片平の下で係長として調査を担当した大塚勝美(1922(T11)年生、1946(S21)年東京大学卒業、同年建設省入省、1958(S33)年日本道路公団名神高速道路部第一課)は、のちに「現在のこんなすばらしい高速道路ができたきっかけをつくった人、夢の実現に邁進した人は、当時の菊池明道路局長であり、もう一人は片平信貴道路企画課長補佐であった」¹¹⁾と述べる。また、武部は、「高速道路がどんなものかわからないような、1953(S28)年3月に、関東、中部、近畿の3地方建設局の担当者が集められ、片平が米国出張で収集してきた資料や写真を見せられ」¹²⁾、インターチェンジの写真に魅入られたという。それが、片平と大塚との出会いであった。

表-1 片平信貴の活動年譜(1913-1989) (参考文献 1) ~9) , 補注(187), (188)をもとに筆者作成)

時代区分	年代		年齢	出来事	アーカイブス (参考文献2参照)	道路計画整備事業に関する動向		社会一般
	西暦年	年号				日本	世界	
誕生から 学生時代	1913	T2	0	福島県信夫郡渡利村に生まれる (9/13)		1919 道路法、都市計画法、市街地建築物法	1925(伊)世界初の高速道路開通	1914 第一次世界大戦、土木学会設立
	1930	S5	16	宮城第二中学校卒業		1931 牧野雅楽之丞『道路工学』刊行		世界恐慌日本に波及 1932 満洲国建国宣言
	1933	S8	19	第二高等学校(仙台)理科甲類卒業		都市計画法改正	アウトバーン建設計画発表	
	1936	S11	22	東京帝国大学工学部土木工学科卒業		藤井真透東大講師(1922-1942)	1,000Km開通式	
内務省 建設省 時代	1936	S11	22	内務省雇(土木局第一技術課) (4/17)		藤井真透 内務省土木試験所長 就任(-1952, 16年間)	(伊)~1935までに約500Km高速道路開通	二二六事件、政党政治終焉 ベルリンオリンピック開催
			23	同上(土木局第二技術課) (11/7)			2,000Km開通式	日中戦争開始
	1937	S12	23	内務技手補(荒川上流改修事務所) (5/4)			3,000Km開通式	満洲国哈大道路建設開始
	1938	S13	24	内務技手(東京土木出張所) (7/18)	(1)		(米)幹線道路網計画	地下鉄(新橋-渋谷)全通
	1939	S14	25	内務技師(内務省土木局) (5/30)			X.Dorsch道路局長	日独伊三国同盟調印
	1940	S15					(米)ペンシルバニアアターンバイク	第二次世界大戦開始
	1941	S16					F.Todt逝去(独)	
	1942	S17	28	(内務省国土局) (3/28)		内務省土木局 重要道路整備調査 1942 大東亜道路会議		
	1943	S18						
	1944	S19			(2)	全国自動車国道網計画 東京~神戸間自動車国道調査	X.Dorsch交通省技監	東京市から東京都へ 東京に初空襲
	1945	S20			(3)			日本敗戦、東京にGHQ設置
	1946	S21	32	内務技官(4/1)	(4)(5)			日本国憲法公布、第一次公職追放
	1947	S22	33			日本道路協会設立		内務省解体、第二次公職追放
	1948	S23	34	総理工技官(建設院地政局) (1/1) 建設技官(建設省道路局) (7/10)	(6)(7)(8)	菊池明 初代道路局長就任	(英)高速道路整備本格化	建設省発足
	1949	S24	35		(9)(10)	道路対面交通実施	(米)30州以上で有料道路建設・計画	日本国有鉄道発足
	1950	S25	36	道路局道路企画課長補佐(3/15)	(11) / (12)(13)		Dorschコバルト会社設立	朝鮮戦争開始
	1951	S26	38	アメリカ合衆国出張(10/8-120日間) 土木専門官(4/1)	(14)(15)(16)			日米安保条約調印、日本都市計画学会設立
1952	S27	39	大臣官房審議室(8/1) 同主査(道路局道路企画課併任)(10/1)	(17)(18)(19)(20)	新道路法成立/建設省 東京~神戸間自動車国道再検討、測量調査		東京国際空港(羽田)開港 東京オリンピック誘致開始	
1953	S28	39	台湾出張(1/22-2週間) 道路視察	(22)(23)(24)(25)		(独)1953-1955建設再開		
1955	S30	40	大臣官房建設機械課長(12/1)	(26)(27)	首都高速道路に関する計画 菊池明第43代土木学会会長就任		東京オリンピック誘致決定	
日本道路 公団時代	1956	S31	42	日本道路公団計画部技術課長(4/20)	(88)(89)	日本道路公団設立	(伊)高速道路整備計画	
	1957	S32	44	名神高速道路部第一課長(10/21)	(28)	ワトキンス調査団来日(5/19) 国土開発縦貫自動車道建設法、高速自動車国道法成立		
	1958	S33	44	名神高速道路部長(5/1)	(29)(30)	名神起工式(1958/10/19)	(英)初の高速道路M6開通	東京タワー完成
	1959	S34	45	アメリカ合衆国出張(4/4-5/4) ドイツ連邦共和国出張(6/5-7/13)	(31)	世銀調査団来日		
	1960	S35	46	アメリカ合衆国出張(2/5-3/24) 世銀借款	(32) (90)	首都高開通、Dorschコバルトを訪問		日米安保条約調印、所得倍増計画
	1961	S36	47	高速道路計画部長(5/16)	(33)			国鉄世銀借款
	1962	S37	48	高速道路第一部長(6/1)	(34)(35)(36)(37)	中央道、東名着工		
	1963	S38		日本道路公団理事(4/16)	(38)	名神要東~尼崎開通(7/16); Dorsch開通式に出席、藤井真透逝去(9/19)		
	1964	S39	50	高速道路静岡建設局長併任(8/1-)	(39)(40)(41)	菊池明風致工学研究会初代部会長(~1973) 東名のコンサルティングをDorschに委託		東京オリンピック開催 東海道新幹線開業
	1965	S40		天皇賜杯(銀杯三号)	(91)	名神高速道路全線開通(7/1)		ヴェトナム戦争勃発(~1975)
	1966	S41		S34.5~S60.5 日本道路協会 理事・常務理事	(100)	国土開発幹線自動車道法成立		人口一億人突破、文化大革命発動
1967	S42			(42)(43)(96)	Dorsch来日・視察			
1968	S43	54	高速道路静岡建設局長退任(-5/1)	(44)(45)(97)(98)(189)	東名高速道路全線開通(3/31)		国民総生産世界第2位	
1969	S44			(92)	中央道調布~河口湖開通			
1970	S45	56	日本道路公団理事退任(6/30)	(48)	道路構造令改正		大阪万博開幕	
道路コン サルタン 時代	1970	S45	56	片平エンジニアリング代表取締役社長(9/1)	(49)	道路法改正		環境庁発足
	1971	S46		↑本社:港区西新橋、業務部、技術部設置	(50)(51) (93)	道路緑化保全協会設立		沖縄返還、列島改造論、日中共同声明
	1972	S47		計画設計部、地質土質部設置	(52)	関門橋開通		オイルショック
	1973	S48		S47.2~S59.2 日本地図センター理事	(53)(54)(55)	沖縄自動車道開通(7/1)		国土庁発足
	1974	S49		渋谷分室設置、本社:銀座へ移転	(56)			沖縄海洋博開催
	1975	S50			(57)			
	1976	S51		S51.3~H1.7 高速道路調査会評議員・監事	(58) (94)			
	1977	S52			(59)(60)(61)			
	1978	S53		設計部、計画部、交通環境部、施工管理部設置	(62)(63)			新東京国際空港(成田)開港
	1979	S54		S54.7~H1.7 交通工学研究会副会長・会長・顧問	(64)(65)(66)			
	1980	S55		海外部、本部長制、総務経理部、営業部設置	(67)(68)(69)	高速道路技術センター設立		
	1981	S56		広島支店設置	(70)(71)(72)(73)			
	1982	S57		S56.5~H1.7 国際建設技術協会理事	(74)(75)(76)(77)	中央高速道路完成(11/10)		東北新幹線、上越新幹線開業
	1983	S58	70	片平エンジニアリング代表取締役会長(12/17)	(78)	中国自動車道全線開通(3/24)		
1984	S59		交通環境部→計画調査部	(79)(80)	KATAHIRA WORD創刊-Sonderegger海外出張者			
1985	S60		名古屋支店設置	(81)	関越自動車道全線開通(10/2)			
1986	S61		技術営業部設置	(82)(83)				
1987	S62	73	片平エンジニアリング・インターナショナル会長(5/1)	(84)	東北道全線開通(9/9)	Dorsch逝去(11/8)	国鉄からJR(民営)へ	
1988	S63	73	片平エンジニアリング名誉会長(5/2)	(85)(86) / (95)	北陸道全線開通(7/20)	(中)北京~鞍山間92km(初)	青函T開業、東京ドーム完成	
1989	H1	75	フィリピン国マニラ市にて逝去(7/3)			(中)大連~瀋陽間375km	昭和から平成へ	



写真-2 右より、片平信貴氏、菊池明氏、岸道三総裁、X.ドルシュ氏。出典：13)

(2) 日本の高速道路誕生期，道路公団時代の14年間

本節は、主に資料 i) の(31)～(34)，(91)を参照。

a) 「陣痛後期」

片平は、戦後から公団設立までを「陣痛前期」とし、1957(S32)年から名神高速道路が供用される1963(S38)年までを「陣痛後期」と区分している。片平が公団に転じて以降を片平の言説から整理すると次のようになる。

「昭和31年の日本道路公団設立，世界銀行との具体的借款交渉，名古屋～神戸間にしぼった路線の確定，具体的な建設設計の開始など，昭和30～32年の3年間は，最もあわただしい，言うならば最も期待に満ちた，最も激しい陣痛の時期である⁽⁶⁷⁾」，「昭和32年以降は具体的な建設のための陣痛の時期といえる。世界銀行との借款条件の交渉，用地買収を中心とした地元との協議，そして技術的な諸問題の検討等がその内容で，いわばすでに生まれることの決まったものに対する準備であった⁽⁶⁷⁾」。

片平は、世界銀行の調査団来日の際には予備交渉を行い，2度の訪米(交渉・調印)と訪独(Dorschコンサルト訪問)に同行出張している。

b) 名神高速道路の「誕生」

1958(S33)年の名神高速道路起工式から5年を経て，「昭和38年7月，日本の最初の高速道路がついに誕生したのである。尼崎～栗東間約71kmの正式供用開始がそれである。胎動をはじめから約23年の歳月と，その間に実に多くの人びとの努力が，名神を生んだのである⁽⁶⁷⁾」，その道路を「毎時一〇〇キロの速度で，日本の風土の中を，四次元のリズムに乗って走る。それは，久しい間，日本の自動車交通の夢であった。したがって日本の道路の悲願でもあった。名神高速道路は，その夢の実現であり，日本における本格的な「高速道路」の長男誕生である⁽⁹¹⁾」には，戦前からの夢の実現の喜びがあふれている。

(3) 日本人技術者の自負 東名高速道路の完成

東名高速道路建設に際して，片平は理事と兼任の静岡建設局長として現場を率いた。そして，東名高速道路の

全線開通の翌1970(S45)年に片平は理事を退任，公団を去る。名神高速道路建設において海外技術者の技術指導を習得した若き技術者たちが，自前で考えながら建設したとされる東名高速道路の完成と彼らの成長を見届け，56才の片平は後進に道を譲り，コンサルタント会社設立への一歩を踏み出す。

(5) 道路コンサルタント設立の理想と現実

日本道路公団理事退任から2ヵ月を経て，小規模・道路専門・国際的なコンサルタント会社を拓く。設立時の理想は，「土木というよりはむしろ道路専門のシンクタンクみたいなものをつくろうと⁽⁶³⁾」考え，「あらゆるものに対してインデペンデントであるということが最も大切だということでその当時つくった⁽⁶³⁾」。会社設立の発意とその後の仕事に対する原動力の背景には，名神高速道路建設時，「渋々依頼したコンサルタントであったが，この2人が残した功績は大きかった⁽⁸²⁾」とする海外技術者らとの出会いがあった。そして，「いずれにしても，今から思うと，ドルシュさんこそが“コンサルタント”であったと思う。われわれは軽々しく，コンサルタントと称しているが，実は設計専門屋であったり，計算屋であったり，まことのコンサルタントは数えるほどしかないことを痛感し，今更ながらドルシュさんの大きさを思う⁽⁸⁴⁾」とコンサルタントの理想の姿をドルシュ氏にみていた。しかし，「片平さんは，外国のコンサルタントのように，知的なアドバイスによって計画や設計の基本が決められるような仕事を望んでおられたようだったが，日本の現実はそのからは遠かった⁽¹¹²⁾」。日本でのコンサルタントの役割に対する限界を感じる一方で，片平らは海外への技術支援を本格化させていく。その実績は，「国内のみならず東南アジアを中心に開発途上国の道路計画や道路技術の向上に努力され，相手国の深い信頼を受けられた。そして，関係諸国の会員の推挙で，58年から3年間，アジア・オーストラリア道路技術協会の会長を務め⁽¹¹⁰⁾」るまでに至る。1987(S62)年，片平エンジニアリング・インターナショナル会長となった片平は，1989(H1)年7月3日の朝，出張先のマニラ市内で急逝した。

4. 片平信貴を囲む土木技術者たち

本章では，日本の近代道路技術者の系譜という意味合いを含め，高速道路史における片平の位置づけについて考察する。

(1) 近代道路を築いた土木技術者の系譜

片平にとって藤井は，道路工学へと導いた最初の人物であり，道路技術者としての高速道路の計画から建設に至るまでを見守り続けた人物となる。片平は，恩師と慕

った藤井の弟子であり、何より近代のエポックである高速道路の計画整備に邁進した中心的人物である。高速道路第一部長となり、現地を案内した弟子を笑顔でいたり、ねぎらった藤井は、その2ヶ月後に亡くなる。片平は「藤井先生は、私にとって数少ない“心の中に生きている人”」であり、「過ちを犯そうとすると“危ない!”と心の奥の声が聞こえる。考えに行き詰まると、“そうだねえ”と、一緒に考えてくれる。仕事が順調に進んでいる時は、ただ静かな笑顔だけが、見守ってくれている」と述懐している⁽³⁷⁾。

また、『道路工学概論』自序には、“最後にこの書が、著者一人の所産ではなく、わが国の道路工学を築き上げ、わが国の道路を愛して来た牧彦七、藤井真透、牧野雅楽之丞、岩沢忠恭、菊池明その他の諸先輩につながる道路技術系列の現代の断面を示したにすぎない。”と記されており、先覚者たちへの敬意とともに系譜を継ぐ者としての自覚のようなものも感じられる。

篠原は、「片平は役人ではなく、その前に道路のエンジニア」であり、「土木エンジニアの伝統を受け継ぐエンジニア」⁽¹⁰⁸⁾と評している。

(2) 「高速道路技術の父」⁽¹¹³⁾

1933(S8)年に発表されたアウトバーン建設計画は、日本でも話題⁽¹⁴⁾であった。藤井と菊池は、国際道路問題調査委員会のメンバーであり、ともにアウトバーンはもちろんのこと日本での高速道路建設に関心が高かった。

菊池は、1942(S17)年2月、帝国アウトバーン道路総監であったF.トット博士が事故で急逝した折、新聞に追悼文⁽¹⁵⁾を寄せる。また、それに先立つ1940(S15)年、藤井は、アウトバーンの計画理念、幾何構造、そして風致と郷土美の概要を新聞で紹介⁽¹⁶⁾している。二人の記事は、若き片平のアウトバーンとドイツの道路技術者への関心を高めた⁽¹⁰²⁾。彼らの思いを受け、日本の本格的高速道路計画建設時代を牽引した片平の報文では、技術者の表現は複数形が常である。例えば、「その底流に常に技術者がいて、名神高速道路を生む緯糸となっていたことを、そしてそれだけが一貫して貫かれていたことを、特に銘記したいと思う」⁽⁵⁷⁾やKATAHIRA & ENGINEERS INの社名表記にも「一人一人の技術者がその専門分野で本当の意味でのコンサルタントであるように」、「片平信貴と、彼を囲む技術者たち」の思いが込められているという。そしてその真意は、「僕はね、梁山泊(有志の巢窟の意:筆者記)をつくりたいんだよねえ」⁽¹⁷⁾の言説からも浮かび上がる。

(3) 高速道路のランドスケープアーキテクト

片平の道路景観に対する明確な関心は、1951(S26)年の報文に確認できる。この報文の文末は、「最後に、道

路が果す観光への役割を、更に完璧に果すために、(中略)観光の人たちと共に「道路美学」と云ったものを確立したいと望んでいる事を附記したい。それは、日本の変化高い風光に適合した道路の構造、近代的な構造美と自然美との共鳴方法等は勿論であるが、新しい考え方として、自動車の速度、方向変換等と、窓外風景の変化速度との関係を求め、人の眼に映る風景変化の最も快適な速度を探求する事など、将来の道路工学に導入されるべきだと考えているのである」⁽¹⁹⁾と結ばれる。

1964(S39)年に設立された高速道路調査会景観部会(設立時の名称は、風致工学研究部会)の初代部長であった菊池の後には、「戦後土木の景観、デザインをリードしたのは道路公団」⁽¹⁰⁸⁾に在籍していた片平が継いだ。そしてまたそこは「景観工学の実質的創始者となる中村が在籍した所」⁽¹⁰⁸⁾であり、「片平さんに触発されて入団した」⁽¹⁸⁾と話す中村について、篠原は、「片平という人物の中に自分と同じ体質、自分がこれから向かおうとする志をすでに実践していることを見てとったからではなかったか。温厚、教養人、そして高い志、これだ、と中村は直感したに違いない」⁽¹⁰⁸⁾と述べる。中村は、第三代の景観部会長となる。

片平の道路景観に対する認識は、アーカイブズの中にその思想的背景や多くの実践例が読み取れる。本稿でアプローチできなかったその分析と体系化は今後の課題としてあげておきたい。しかし、片平は景観思想に対する理解を深め、かつ現場で景観設計の実践を試みた第一人者であるといっても過言ではないだろう。その思いは、「私も片平さんとの出会いが道路景観に大きな興味を持つきっかけ」⁽¹⁶¹⁾⁽¹⁹⁾と述べる大泉らに継承されている。

(4) コンサルタント

片平の世界を見据えたまなざしは、戦前から戦後にかけて進められた一連の高速道路の調査計画、具体的には、自動車国道網の策定の折の「いわゆるアジア・ハイウェイ」⁽³⁴⁾の頃から芽生えていたといえるのではないだろうか。名神高速道路建設を通じて海外から導入することとなった新しい技術と思想の習得は、海外への支援に惜しみなく活かされた。海外に向けられた技術支援の姿勢の根底には、ドルシュ氏がそうであったように、「ローカルのマテリアルについてとか、ローカルのいろいろなコンディションについては彼らの方が上で、われわれもその知識を入れながら、こんどは、われわれの知識を彼らの中につぎ込んで一緒にものをつくりあげてゆくというコンサルテーション、頭からお前たちを指導するというのではなくて、一緒にやるのだというヒロソフィを前から持っているものですから」⁽⁶³⁾が根ざしており、その技術支援のあり方は、フィリピンでの評価やREAAA会長として選任されたことから伺い知る事ができる。

謝辞：本稿をまとめるに際し、武部健一氏、浅見邦和氏、大泉紀男氏、向山花織氏をはじめとする株式会社片平エンジニアリング関係者各位に多大なるご協力を賜りました。また、別テーマでの取材の折に、岩間滋氏、大塚勝美氏、中村良夫氏から伺った片平氏に関する話も参考にさせていただきました。感謝申し上げます。

補注：

- (i) 武部健一：1948年京都大学土木工学科卒業。特別調達庁、建設省関東地方建設局を経て、56年日本道路公団へ。名神高速道路部第一課、東名高速道路計画課長、静岡建設所調査役、東京建設局長、常任参与等を歴任。81年片平エンジニアリングへ。現在、道路文化研究所理事長。
- (ii) 大泉紀男：1963年東京農業大学農学部造園学科卒業後、日本道路公団に入る。92年片平エンジニアリングへ。取締役、専務取締役、現在、特別技術顧問。
- (iii) 浅見邦和：1972年中央大学土木工学科卒業後、片平エンジニアリングに入社。現在、理事。
- (iv) 藤井真透(1889(M22)年～1963(S38)年)：1914年東京帝国大学工科大学土木工学科卒業後、大阪府庁に入る。明治神宮造営局技師-神宮外苑道路工事、内務省土木試験所第4代所長を歴任。東大、日大で講師を兼務し、退官後は日大理工学部大学院で教授として生涯道路工学を教え続けた。
- (v) 菊池明(1899(M32)年～1973(S48)年)：1925年東京帝国大学工学部土木工学科卒業。内務省土木局、下関土木出張所、国土局、興亜院を経て、国土局土木課長、建設省初代道路局長、建設省技監を歴任。土木学会会長、日本道路公団理事、高速道路調査会風致工学研究部会初代部会長、社団法人日本道路協会第二代会長、社団法人道路緑化保全協会初代会長、第13回国際道路会議(東京)議長等をつとめた。
- (vi) 牧野雅楽之丞(1883(M16)年～1967(S42)年)：1909年東京帝国大学工科大学土木工学科卒業後、内務省入省。内務技師任官、東京土木出張所、下関土木出張所長、土木試験所第2代所長を歴任。退官後、メキシコや東南アジア諸国等に対して道路技術による海外協力の端緒を開いた。
- (vii) 中村良夫：1963(S38)年東京大学工学部土木工学科卒業。日本道路公団に入る。東京大学助手、東京工業大学教授、現在名誉教授。

片平信貴アーカイブズ(194編)

i) 片平信貴が著した論文、報文-共著・対談を含む-(86編) 一官吏時代(1936～1956) 27編一

- (1) 「時距圖表による街路交叉點の解析」：『道路の改良』、第20巻第3号、土木学会、pp. 38-50、1938年1月。
- (2) 「道路輸送に就て」の謬見を匡す：『道路』、pp. 155-163、1944年3月。
- (3) 道路の輸送能力 主として集団輸送の諸問題に就て：『道路』、pp. 46-53、1945年11月。
- (4) 建設論叢書：『道路』、pp. 86-94、1946年1月。
- (5) 国土省設置の基礎理念(続建設論叢書)：『道路』、pp. 124-128、1946年2月。
- (6) 知事に道路行政を聴く：『道路』、pp. 249-251、1949年9月。
- (7) ソイルセメント舗装の実績：『道路』、ワトキンスC.L., 片平信貴訳、浅井新一郎訳、pp. 252-253、1949年9月。
- (8) ダーウィン道路-これはダーウィンへの道路の苦難の歴史と、現在の沿道案内である-：『道路』、p. 253、1949年9月。
- (9) 知事に道路行政を聞く(2) 栃木県の巻：『道路』、pp. 112-113、1950年4月。
- (10) 知事に道路行政を聞く(2) 長崎県の巻：『道路』、pp. 113-114、1950年4月。
- (11) 米国通信 第1報：『道路』、pp. 378-380、1950年12月。
- (12) アメリカより 米国通信第2信：『道路』、pp. 12-19、1951年1月。
- (13) 米国の道路視察の印象-斜視の第1報-：『道路』、pp. 78-79、1951年3月。

- (14) 道路改良順位決定の基礎としての要改良度算定方法：『道路』、pp. 102-105、1951年4月。
 - (15) 米国の道路行政について：『土木学会誌』36(9)、pp. 26-29、1951年9月。
 - (16) 高速自動車道路：『建設月報』4(11)、pp. 14-16、1951年11月。
 - (17) 高速自動車道路の夢：『道路』、pp. 178-181、1952年5月。
 - (18) 道路構造の最近の考え方について：『土木学会年次学術講演会講演概要 Vol. 18』、pp. 434、1952年。
 - (19) 道路事業と観光：『国際観光』15(15)、pp. 6-9、1952年。
 - (20) 我国の道路事情より見た自動車諸元の限界に就て：『日本道路会議論文集論文』No. 113、第1回特定課題、建設省道路局、1952年11月。
 - (21) 有料道路の諸問題：『建設月報』4(8)、pp. 17-20、1952年11月。
 - (22) 高速自動車道路：『建設月報』6(1)、pp. 1-5、1953年1月。
 - (23) 我国の高速自動車道路の構想：『国土開発』2(2)、pp. 6-8、1953年2月。
 - (24) 台湾の印象：『建設月報』6(4)、pp. 19-22、1953年4月。
 - (25) 台湾視察報告：『道路』、pp. 158-165、1953年4月。
 - (26) 道路と速度-主として設計速度について-：『道路』24(9)、pp. 98-103、1955年3月。
 - (27) 建設の機械化について〔I〕：『土木学会誌』40(7)、p. 28、1955年7月。
- #### 一日本道路公団時代(1956～1970) 21編一
- (28) 道路協会10年の歩み：『道路』、pp. 567-569、1957年10月。
 - (29) 「道路交通の現況と将来の見通しについて」の座談会報告：『道路』、pp. 37-39、1958年1月。
 - (30) わが国高速道路の技術的諸問題：『高速道路』(創刊号)、pp. 16-19、1958年5月。
 - (31) 名神高速道路計画の概要：『日本道路会議論文集論文』No. 15、第5回一般論文、1959年10月。
 - (32) 高速道路の計画：『最近の道路問題と高速道路』、pp. 155-168、社団法人土木学会編、1960年8月。
 - (33) 高速道路とともに：『道しるべ』、1961年。
 - (34) 名神高速道路の一部完成までをかえりみて：『道路』、pp. 606-610、1963年。
 - (35) 第7回日本道路会議 第4部会報告：『道路』、pp. 978-979、1963年12月。
 - (36) 座談会 欧州の道路事情を聞く：『道路』、pp. 1056-1067、1963年12月。
 - (37) 藤井先生の思い出：『土木技術』18(12)、pp. 7-8、1963年12月。
 - (38) IRF東京会議を顧みて：『道路』、pp. 688-700、1964年8月。
 - (39) 座談会 日本の高速道路を造る-20年のあゆみ-：『高速道路と自動車』12(10)、pp. 32-48、1964年9月。
 - (40) 高速道路建設における土質工学上の諸問題：『土と基礎』12(12)：pp. 1-2、1964年12月。
 - (41) 東京～神戸間高速道路：『土木学会誌』49(11)、pp. 30-34、1964年。
 - (42) 舗装考 数字の魔力：『舗装』第2巻、p. 7、1967年7月。
 - (43) 座談会 協会20年の歩みと明日への課題：『道路』、pp. 8-21、1967年9月。
 - (44) 東名高速道路開通に際して- 回顧と展望-：『高速道路と自動車』11(5)、pp. 18-22、1968年5月。
 - (45) ハイウェー対談：『道路』、pp. 40-47、1968年8月。
 - (46) 座談会 東名高速道路建設ものがたり：『高速道路と自動車』12(6)、pp. 39-50、1969年6月。
 - (47) シンポジウム 高速道路と自動車交通：『高速道路と自動車』12(10)、pp. 37-58、1969年10月。
 - (48) 道路交通問題ノート：『建設月報』23(2)、pp. 12-14、1970年2月。
 - (49) 東名高速道路建設誌の序文：日本道路公団東名高速道路建設誌編さん委員会、1970年3月。
- #### 一道路コンサルタント時代(1970～1989) 36編一
- (50) 花々と庶民：『道路』、pp. 42-43、1971年8月。
 - (51) 海外の技術協力の問題点を探る-道路建設を中心として-：『高速道路と自動車』14(12)、pp. 34-45、1971年12月。
 - (52) 座談会 自動車道と鉄道における有効利用の問題点：『高速道路と自動車』15(11)、pp. 34-44、1972年11月。
 - (53) ブラジルの印象：『道路』、pp. 71-74、1973年1月。
 - (54) 座談会 道路技術の問題点と今後の方向：『道路』、pp. 34-46、1973年7月。
 - (55) 随想 10年後を楽観する(高速道路、高速道路調査会の歩み)：『高速道路と自動車』16(11)、pp. 35-36、1973年11月。
 - (56) 高速道路網建設の問題点と今後の方向-新しい道路づくり(道路交通の未来像)：『高速道路と自動車』17(3)、pp. 12-15、1974年3月。

- (57) 名神高速道路を生んだもの：『土木学会誌』60(1), pp. 63-65, 1975年1月。
- (58) 道路計画に対する姿勢：『高速道路と自動車』19(10), pp. 7-10, 1976年10月。
- (59) 座談会 道路協会のあゆみと今後の展望：『道路』(436), pp. 14-25, 1977年6月。
- (60) 知事に道路行政を聴く 福島県の巻：『道路』, pp. 33-34, 1977年6月。
- (61) 知事に道路行政を聴く 長野県の巻：『道路』, p. 34, 1977年6月。
- (62) 国際協調と道路建設：『高速道路と自動車』21(5), pp. 7-10, 1978年5月。
- (63) (株)片平エンジニアリング社長 片平信貴氏に訊く：『建設コンサルタント会報』通巻No. 102, pp. 2-14, 1978年9, 10月。
- (64) 第2回アジア・オーストラレーシア道路技術会議(REAAA)出席報告(舗装特集)：『道路』(456), pp. 45-49, 1979年2月。
- (65) アジア・オーストラレーシア道路協会 シンポジウムおよび総会出席報告：『道路』(460), pp. 94-95, 1979年6月。
- (66) REAA第16回 Council Meeting 報告：『道路』(462), pp. 90-92, 1979年8月。
- (67) REAA第17回評議員会報告(海外情報)：『道路』(469), pp. 863, 1980年3月。
- (68) 国際協力と海外活動の現状(国際協力特集)：『道路』(473), pp. 5, 1980年7月。
- (69) アジア・オーストラレーシア道路技術会議第18回評議員会：『道路』(474), pp. 867, 1980年8月。
- (70) 季節と花と技術協力：『高速道路と自動車』24(3), pp. 16-17, 1981年3月。
- (71) 座談会 わが国における高速道路の発展と自動車の技術進歩をめぐって：『高速道路と自動車』24(6), pp. 16-23, 1981年6月。
- (72) REAAAアジア・オーストラレーシア道路技術協会3回道路会議・会議総会ならびに第20および第21回評議員会報告：『道路』(485), pp. 837, 1981年7月。
- (73) REAA 第22評議員会報告(海外情報)：『道路』(490), pp. 58-60, 1981年12月。
- (74) 待宵の小侍従：『道路』(495), p. 53, 1982年5月。
- (75) REAA第23回評議員会出席報告(海外情報)：『道路』(497), pp. 778, 1982年7月。
- (76) REAA第24回評議員会出席報告(海外情報)：『道路』(501), pp. 7472, 1982年11月。
- (77) 道路-トンネル等を含む(部門別)こみた事業と人物譜7-官学主導による向上一直線)：『土木学会誌』67(11), pp. 41-43, 1982年10月。
- (78) 日本の道路会議(論壇)：『道路』, p. 2, 1983年12月。
- (79) 牧野雅泰之丞：『土木学会誌』69(6), p. 38, 1984年6月。
- (80) 肩に力を入れないで一主に海外だより-KATAHIRA WORLD No. 1 創刊号, 1984年。
- (81) ことばとこころ(随想)：『高速道路と自動車』28(7), pp. 16-17, 1985年7月。
- (82) 道路と体温(随想)：『高速道路と自動車』29(4), pp. 20-21, 1986年4月。
- (83) OUR REGION(ひとこと)：『道路』, p. 71, 1986年11月。
- (84) コンサルタント・ドルシュさん(追悼)：『高速道路と自動車』30(3), p. 11, 1987年3月。
- (85) 大先輩に聞く-富樫凱一名誉会員(インタビュー)-：『土木学会誌』74(1), pp. 2-6, 1989年1月。
- (86) 景観設計に色を：『高速道路と自動車』32(6), pp. 20-21, 1989年6月。
- ii) 片平信貴の著あるいは編による冊子, 文献-序文含む- (9編)
- 一官吏時代 (1936~1956) 1編一
- (87) 高速自動車道路 Freeway Autobahn Motor 建設省, 1952
- 一日本道路公団時代 (1956~1970) 5編一
- (88) 道路工学概論-共立全書, 1956。
- (89) 道路工学-技報堂, 1956。
- (90) 高速道路の計画：『最近の道路問題と高速道路』, 土木学会, pp. 155-168, 1960。
- (91) 片平信貴編, 早川精, 武部健一：名神高速道路-日本のアウトバーン誕生の記録-, 1965。
- (92) 武部健一, 八木 寿：『インターチェンジの計画と設計』の序文, 鹿島研究所出版会, 1969。
- 一道路コンサルタント時代 (1970~1989) 2編一
- (93) 高速道路における最近の技術的諸問題：片平信貴氏退任記念論文集, 片平信貴氏退任記念事業実行委員会編, 技術書院, 1971。
- (94) ローレンツ博士とドルシュ氏：『道路の線形と環境設計』の序文, ハンス・ローレンツ著/中村英夫・中村良夫編訳, 鹿島出版会, 1976。
- 一私人(俳人)としての活動 (1940~1989) 1編一
- (95) 片平社翠『ブーゲンビリア 片平社翠遺言集』, 卯辰山文庫, 1995。
- iii) 他者が片平について紹介, 論評した文書 (14編)
- (96) 読売新聞：日本坂トンネル貫通式 [カメラ・ニュース], 1967年6月14日夕刊3面。
- (97) 読売新聞：「東名高速道」開通するが… [都市をわれらの手に], 1968年4月23日夕刊7面。
- (98) 読売新聞：高速時代-慣れない運転者：1968年4月25日夕刊10面
- (99) 読売新聞：つぎは東北、北陸道だ “ハイウェイ男” 片平さん：1969年5月26日夕刊10面。
- (100) 旬刊「高速道路」人物記採録 1966-1995：あの人・この道・30年, 高速道路技術センター, 1995。
- (101) 高速道路技術センター：はじめての挑戦, 2000年6月。
- (102) 加藤宣利(共同通信社元論説委員)：回想のハイウェイ-夢に挑んだ男たち-, ぎょうせい, 2000年9月。
- (103) 中村良夫：回遊庭園国土を構想しよう, 『高速道路と自動車』43(10), pp. 7-8, 2000年10月。
- (104) 国土政策機構：国土を創った土木技術者たち(道路と土木技術者：通史, 人物紹介, 執筆 武部健一), 鹿島出版会, 2002年2月。
- (105) 香川周平：片平信貴の仕事と道路計画・設計思想 - 名神・東名高速道路の建設に着目して-, 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻景観研究室修士論文, 2008年3月。
- (106) 橋本政子・齋藤 潮：名神・東名高速道路におけるドイツ人技師ドルシュの設計思想に関する研究, 土木学会『景観・デザイン研究論文集No. 8』, pp. 41-49, 2010年6月。
- (107) 名神高速道路全通45周年にあたって：『土木学会誌』95(7), pp. 45-52, 2010年7月(なお, 学会誌では, 片平信貴について語られた部分は省略されている)(PDF) <http://www.jsce.or.jp/journal/topics/topics20100705.pdf>。
- (108) 篠原修：ピカソを超える者は, 技法堂出版, 2008年9月。
- (109) 松本洋：地球建築士, 柏艚社, 2008年12月。
- iv) 片平を追慕, 追悼した文・冊子 (79編)
- (110) 三野 定(住友建設株式会社代表取締役)：「故 名誉会員 片平信貴氏のご逝去をいたむ」, 『土木学会誌』74(11), p. 75, 1989年9月。
- (111) 浅井新一郎(社団法人交通工学研究会会長, 首都高速道路公団理事長)：「片平信貴前会長のご逝去を悼む」, 『交通工学』, 1989年5月号。
- (112) 武部健一(片平エンジニアリング取締役社長)：「天命を知る人-片平信貴さん」, 『高速道路と自動車』33(3), 1990。
- (113) 戸谷是公(財団法人高速道路技術センター理事長)：「ある道路技術者と俳句の道-片平信貴氏を偲ぶ」, 『EXTEC』1989年12月号。
- (114) アジアオーストラレーシア道路技術協会：「故片平信貴氏を讃える」, REEE総会にて, 1990年3月。
- (115)~(138) 『旧交会報』第22号 (1989年11月)：
- * 旧交会：内務省・建設院・建設省・運輸省・国土庁・北海道開発庁・国土交通省の勅任官であった者・一級官・その他技術職者の退職者で構成
- (115) 井関正雄「片平信貴君の思い出」。
- (116) 伊吹山四郎(大林道路株式会社 取締役相談役)「まめだった片平信貴さんを悼む」。
- (117) 内田 襄(大成工務株式会社 代表取締役社長)「惜しい人」。
- (118) 大串満馬「片平信貴氏と私」。
- (119) 大塚勝美(東京道路エンジニア株式会社 代表取締役社長)「高速道路の夢を自ら実現した人」。
- (120) 小栗良知(国際建設技術協会 理事長)「追想の言葉」。
- (121) 尾之内由紀夫(三菱地所株式会社 顧問)「片平信貴さんのこと」。
- (122) 河北正治(古河金属機械株式会社 常任顧問)「片平君と高速道路」。
- (123) 熊本政晴(全国土木部長会 名誉会長)「灯(片平くんと最後の会話)」。
- (124) 小林元椽(新日本土木株式会社 相談役)「片平先輩を偲ぶ」。
- (125) 斎藤義治(三井建設株式会社 相談役)「高速道路の先駆者片平さん」。
- (126) 坂田 中「高速道路の草分け」。
- (127) 住友 彰(株式会社橋梁コンサルタント 代表取締役社長)「片平君を偲ぶ」。
- (128) 多田安夫(川鉄鉄構株式会社 常勤顧問)「年賀状の俳句」。
- (129) 田中淳七郎「故片平信貴博士」。
- (130) 田邊末信(新日本製鉄株式会社 参与)「片平信貴さんを偲んで」。
- (131) 谷藤正三(セントラルコンサルタント株式会社 取締役相談役)「片平信貴さんを偲んで」。
- (132) 藤森謙一(株式会社八洲建設コンサルタント取締役会長, 株式会社極東鋼弦コンクリート振興 顧問)「俊秀、片平信貴君を悼む」。

- (133) 深井浩三 (日本技術開発株式会社 顧問) 「片平信貴さんの思い出」.
 (134) 堀内弘顕 (株式会社大本組 顧問) 「片平さんと東名の思い出」.
 (135) 三野 定 (住友建設株式会社 代表取締役副会長) 「片平信貴さんを偲ぶ」.
 (136) 山本三郎 (財団法人日本住宅総合センター 副理事長) 「片平信貴君を憶う」.
 (137) 吉田喜市 (飛鳥建設株式会社 代表取締役副社長, 兼日本大学理工学研究所教授) 「片平信貴さんを偲びて」.
 (138) 渡邊修自 (日本道路公団副総裁) 「片平さんを偲ぶ」.

(139)～(157) 『KATAHIRA WORLD』片平名誉会長追悼号 (1989年11月5日)

株式会社片平エンジニアリング:

- (139) 武部健一 (代表取締役社長) 「弔辞」.
 (141) 土肥正彦 (副社長, 株式会社片平エンジニアリング・インターナショナル社長) 「片平さんの思い出」.
 (142) 河合洋一 (元常務取締役) 「今は亡き片平会長との出会い」.
 (143) 大西 淳 (常務取締役) 「片平名誉会長との出会いと思い出」.
 (144) 入野 正 (株式会社片平エンジニアリング) 「会長の思い出」.
 (145) 河北正治 (友人代表) 「弔辞」.
 (146) 亀卦川振興 (日本舗道株式会社相談役) 「片平さんの思い出」.
 (147) 漆山えり子 (元秘書/旧姓水上) 「片平社長の思い出(ひとりごと)」.
 (148) 小川恵子 (元社員/現地質土質部次長夫人) 「芝ビル」.
 (149) 山梨悦子 (元社員/現施工管理部係長夫人) 「片平会長の思い出」.
 (150) 浅井新一郎 (社団法人交通工学研究会会長, 首都高速道路公団理事長): 「片平信貴前会長のご逝去を悼む」(『交通工学』1989No. 5より一部抜粋).
 (151) 曲尾 晃 「片平会長を偲んで」.
 (152) 岩井 健 「会長とシャツ」.
 (153) 浅見邦和 「会長の思い出」.
 (154) 野本吉憲 「思い出の2コマ」.
 (155) 熊谷明芳 「片平会長との出会い」.
 (156) 川崎 寿 「出来の悪い社員」.
 (157) 泉本綾子 「じっちゃんのおいし」.
 (158) 戸次庸夫 (株式会社片平エンジニアリング・インターナショナル副社長) 「ボニファッシュへの道」.

(159)～(186) 『片平信貴氏を偲ぶ』 (1990年7月3日):

- (159) 足立 洪 (株式会社復建エンジニアリング社長) 「片平さんの思い出」.
 (160) 稲田倍徳 (東海大学工学部教授) 「片平さんの思い出」.
 (161) 大泉紀男 (日本道路公団仙台台管理局古川管理事務所長) 「にこやかな笑顔」.
 (162) 桂木睦夫 (五洋建設株式会社常務取締役) 「片平さんのサイン」.
 (163) 金谷重亮 (日本道路公団常任参与) 「片平さんの思い出」.
 (164) 河島 恒 (日本高速通信株式会社常務取締役) 「交通技術の先駆者を偲ぶ」.
 (165) 北村照喜 (大成建設株式会社常務取締役) 「片平さんの思い出ふたつ」.
 (166) 久野悟郎 (中央大学理工学部 教授) 「「片平先生」を偲ぶ」.
 (167) 熊谷和夫 (中日本ハイウェイ・パトロール株式会社社長) 「片平 (元) 高速道路静岡建設局長を偲ぶ」.
 (168) 倉沢真也 (日本道路公団東京第一管理局技術部長) 「ヤングパワーの片平さん」.
 (169) 近藤 正 (西松建設株式会社常務取締役) 「ライク・マイ・サン わが息子のよう」.
 (170) A・I・ゴゴ (プロコンサルタント社長) 「忘れ得ぬ人」.
 (171) P・A・ゴンザレス (テクニクスグループ・コーポレーション会長) 「片平信貴さん、人間として、友として一周忌によせて」.
 (172) 杉田美昭 (日本道路公団理事) 「片平さんを偲ぶ」.
 (173) 鈴木溪二 (株式会社復建エンジニアリング相談役) 「片平信貴さんの思い出」.
 (174) 関根栄一 (浦和土建工業株式会社土木部理事) 「温かい思い出」.
 (175) 武田文夫 (帝京科学技術大学教授, 財団法人高速道路調査会参与) 「片平信貴氏を偲ぶ」.
 (176) 多勢 隆 (株式会社日本建設技術社常務取締役) 「遠くて近い片平さん」.
 (177) 中大路為昭 (ピー・エス・コンクリート株式会社) 「交通工学の師, 片平さん」.
 (178) 中村文男 (株式会社浅沼組常務取締役) 「片平さんのお蔭で」.
 (179) 七宮 大 (大日コンサルタント株式会社副社長) 「高邁なる老師 “片平信貴さん”」.
 (180) 橋本弘之 (日本道路公団東京第二建設局局長) 「偉大な先輩」.
 (181) 長谷義明 (日本道路公団技術部長) 「片平さんの思い出」.

- (182) 早川 精 (大豊建設株式会社顧問) 「片平さんとのこと」.
 (183) 平永 博 (名古屋道路エンジニア株式会社 社長) 「片平さんを偲んで-片平さんに教えられたこと-」.
 (184) 平野 實 (日本道路公団 維持施設部維持企画課長) 「静かな微笑を浮かべて」.
 (185) 星埜 和 (東京大学名誉教授) 「技術者として良心に従い信念を通した人」.
 (186) 三瀬 純 (大旺建設株式会社専務取締役) 「ゴライ河架橋調査の思い出」.
 (187) 株式会社片平エンジニアリング: 30周年記念誌 (座談会, 社友からのメッセージ, 役員からのメッセージ), 2001年3月.
 (188) 株式会社片平エンジニアリング: 第44期創立記念式典 片平信貴氏生誕100周年記念講演会 (配布資料), 2013年9月.

v) その他: i)～iv)の引用や派生による主な記録物 (6編)

- (189) 『日本縦貫ハイウェイ 少年の科学』: 鹿島研究所出版会, 村上永一, 神戸淳吉, 1968年6月.
 (190) 『片平信貴氏を偲ぶ』: 片平信貴氏を偲ぶ会, 1990年7月
 (191) 『はじめての挑戦 高速道路づくりの物語』: 財団法人高速道路技術センター, 2000年6月.
 (192) 『片平信貴のすべて』 (CD-ROM): 株式会社片平エンジニアリング (非売品), 2001年7月.
 (193) 『日本初のハイウェイ 勝負は天王山』 (DVD/映像版): NHKプロジェクトX, 第121回 200年7月15日放送, 2004年.
 (194) 『日本初のハイウェイ 勝負は天王山』 (コミック版プロジェクトX挑戦者たち): NHKプロジェクトX 制作班, 宙出版, 2004年.

参考文献

- 1) 日本道路公団名神高速道路建設誌編さん委員会: 名神高速道路建設誌 (総論), 1966.
- 2) 日本道路公団名神高速道路建設誌編さん委員会: 名神高速道路建設誌 (各論), 1967.
- 3) 日本道路公団東名高速道路建設誌編さん委員会: 東名高速道路建設誌, 1970.
- 4) 日本道路公団三十年史編纂委員会: 日本道路公団三十年史, p. 470, 1986.
- 5) 日本土木史編集委員会: 日本土木史-大正元年～昭和 15年, 日本土木学会, 1965.
- 6) 日本土木史編集委員会: 日本土木史-昭和 16年～昭和 40年, 日本土木学会, 1965.
- 7) 池上雅夫: 東名高速道路, 中央公論社, 1969.
- 8) 吉田喜市: 高速道路建設史, 旬刊高速道路編集局, 1972.
- 9) 三野定: 高速道路のプランニング, 全国加除法令出版, 1973
- 10) 前掲出 8) pp. 19-21.
- 11) 大塚勝美: 私の高速道路建設史, 旬刊高速道路新聞, (「高速道路」6号, 1966年3月5日掲載)
- 12) 武部健一: 片平信貴と高速道路, 片平信貴氏生誕 100周年記念講演会, 2013年9月.
- 13) 岸道三追悼録刊行会: 岸道三, 橋本乙次編, 1964.
- 14) 国際道路問題調査委員会: 道路の改良 15(1), pp. 196-197, 1933. (藤井真透, 菊池明らは委員として参画. 国際道路会議の議題や欧米の道路計画整備に関する調査研究を進めていた).
- 15) 菊池明: トットの業績, 朝日新聞, 1942年2月13日朝刊.
- 16) 藤井真透: ドイツの自動車国道, 読売新聞, 1940年10月1日朝刊.
- 17) 前掲出 12)
- 18) 筆者の中村良夫へのヒアリングに基づく.
- 19) 筆者の大泉紀男へのヒアリングに基づく.

(2014. 4. 7受付)